

## 中世

### 一般

評者の個人的感想かもしれないが、二〇二二年は良きにつけ悪しきにつけ「節目」を感じさせる一年であった。まず(比較的)良い面から。

ここ数十年の西洋中世史を、特に「国際標準化」の側面において牽引してきた二名の研究者の節目を記念する論文集が刊行された。春田直紀・新井由紀夫・David Roffe編『歴史的世界へのアプローチ』(刀水書房、二〇二一)、以下『歴史的世界』は、本書を捧げられた鶴島博和のエネルギーシユな執筆活動や豊富な共同研究を反映して、国際色豊かなコレীগたちが寄稿している。それに対して、高山博・亀長洋子編『中世ヨーロッパの政治的結合体』(東大出版会、以下「政治的結合体」)は、堀米庸三、城戸毅、樺山紘一などの往年の「退官記念論集」のように、高山のデイスキプリーが集結する。ただし、教育・キャリアの配慮により、大学院博士課程の学生やポスドクも参加させている点は、かつてのものとは異なり今風。無論、これは大いに評価されるべきである。

西洋中世史のような面倒な学問は、一本の研究論文を著すのに莫大な時間と労力を必要とする。よって単独著者による「論文集」の出版は、その研究者にとっての大きな節目となる。大部な井内敏夫『ポーランド中近世史研究論集』(刀水書房)をひもと

いてみよう。現在はロシアによるウクライナ侵略戦争の渦中にあるが、ヨーロッパでも特異な国であるポーランドは、これらのもと密接な歴史的關係にある。その初期の様相に関わる高度な学術的議論が、日本語で読めることの有難さを痛感する。阪西紀子『北欧中世史の研究』(同)は、早逝された研究者の追悼で編まれたもの。そこには上肥恒之、小澤実、秋山晋吾ら同僚・後学の温かい弔辞が並び、歴史学者、あるいは西洋中世史研究者のカマドリの健在さを感じて、哀しみが癒されよう。

とはいえ、現役世代の日常を見ると、世知辛い状況が嫌でも目に飛び込んでくる。二〇二二年一月の大学入試共通テストの「世界史B」で、電子機器をもちいた不正行為が起こったのは記憶に新しいが、くだんの問題が西洋中世史に関わるものであったことは、どれほどの読者が知っているであろうか。それはサンッド二教会の王家の墓棺を扱ったもので、カペー朝による王権の強化・喧伝のありようを具体的に示す(解答も容易な)良問であった。よって、この不正行為には人一倍、残念な気持ちになった。「もしかして、不正は中世の問題だったからか」と邪推したくなるのは、二〇二二年度の高校一年生より「歴史総合」が実施されたからか。かれらがその後「世界史探究」を選択しなかった場合、西洋の前近代に関する学校的な知識は、「中学社会」のほんのわずかな記述に依存するようになる。津田拓郎・森悠人「令和3年発行中学校社会科歴史的分野の教科書における西洋中近世史の扱いについて」(「ヨーロッパ文化史研究」二三)は、これを踏まえたリアルな調査報告で、一読に値する。

肉薄する。史料上の些細な文言から、国王の統治実践や家臣の中央政治への参与、君主観・イデオロギーなど大きな話につながる力強い筆致には圧倒される。津田拓郎は「いわゆるカピチュラリア」とその管理・利用に関する研究を、ドイツの著名な初期中世研究の雑誌に載せた。「Die sogenannten Kapitularien und ihre Archivierung in der Karolingerzeit」(*Frühmittelalterliche Studien*, 56)。

杉崎泰一郎「初期中世ガリアの聖女伝についての一考察」(松本悠子・三浦麻美編著「歴史の中の個と共同体」中央大出版部)は、パリの守護聖人として名高いジュヌスヴィエーヴの聖女伝を丹念に読解する。聖マルティヌス伝など他のテクストとの比較により、この聖女の特異な位置付けや役割が指摘されている。長澤咲耶「カロリング期の説教」(「クリオ」三五・三六)は、中世初期を対象とした説教研究の空乏を踏まえ、ラバヌス・マウルスによる二つの説教集を検討する。一方は民衆や教区司祭の教化を目的としたものであり、他方は皇帝(君主鏡)や廷臣を意識していたことが確認され、カロリング朝の文化政策における高位聖職者の幅広い役割が示されている。城戸照子「八—一〇世紀イタリア半島北部・中部の貨幣と造幣権力の多様性」(「歴史的世界」)は、著者の一連の貨幣史研究。経済的機能と「威信財」としての役割という貨幣の二面性が、政治的混乱の時代・地域においていかなるグラデーションを見せていたのかを論じる。

岡地稔「ヨーロッパ中世の文字遊び・名前・暗号」(「アカデミア」(南山大)人文・自然科学二三)は、魅力的な事例が平易に述べ

られており、学部生への誘いとしては有益。宮松浩憲「ウルガータ版聖書を捕まえる」(「経済社会研究」六二)、同「中世フランス・イタリアの「食人種」たち」(同)は、「食べる」という動詞をめぐって聖書学を探訪し、ついでその比喩的表現を盛期中世以降の事例から紹介する。

翻訳等。加納修・小坂俊介・村田光司「ヨルタネス」(「ゲテイカ」翻訳(一))、「東方キリスト世界研究」六)により、ゴート人に関する基本史料の待望の翻訳が始まった。山本成生「カールの書簡の書」と「ウイーン四四九番写本」(「昭和女子大学文化史研究」二四、二〇二二)、同「教皇ザカリアスによるフランク王国宮宰ピピン宛書簡(七四七年)の解題と翻訳」(同二五)は、カロリング朝成立前夜のガリア教会の事情を伝える。

盛期中世(一一—一三世紀) 渡辺節夫訳著「国王証書とフランス中世」(知泉書館)は、証書のエキスパートによる史料翻訳集。証書の翻訳集は中世史学徒に待ち望まれていたものであり喜ばしいものの、補足説明や読解の手引きが不足しており、やや残念。藤澤房俊「フリードリヒ2世」(平凡社)は、イタリア近現代史研究者によるライフワーク的な作品だが、主要なトピックが簡明に記されており、カントロヴィチの著名で浩瀚な伝記とは別の価値があるだろう。

青山由美子「中世フランドル伯領の領邦統治」(「政治的結合体」)は、先進的とされる同伯尚書部の一二世紀の状況に迫る。証書における証人欄の序列や出現回数、または人名に併記される肩書から尚書部役人の角逐やキャリアパスなどが明らかにされる。

日本の歴史学界—あるいは西洋史学界—における中世史のプレゼンスも、低下の一途を辿っている。昨年は、戦後三度目となる《岩波世界歴史》で西洋中世を扱う二巻が刊行された。「西アジアとヨーロッパの形成」(同8)と「ヨーロッパと西アジアの変容」(同9)である。小澤実や黒田祐我らによる冴えた文章もあるが、全体としては上記の傾向を感じざるを得なかった。関係者には見えない多くの苦勞があつたと思われ、具体的な理由を記すことは控えるが、やるせない気持ちになつたのは事実である。とはいえ、前回の《講座世界歴史》も当初は不評であつたと記憶している。この感想が、浅学非才な評者の杞憂であつてほしいものである。

「節目」には良い意味もあるのを忘れてはならない。ジョン・H・著、國師宣忠、赤江雄一訳、「中世史とは何か」(岩波書店)は、今後の若手研究者のよき羅針盤となるであろう。また中堅を中心として西洋中世(史)の魅力を伝える複数の書籍が現在企画されており、頼もしい限りである。最後に、「西洋中世学会若手セミナー」頭と舌で味わう中世の食文化(実行委員長松本涼)が、コ罗纳禍のなかに細心の注意を払って開催され、研究者に限定されない幅広い参加者を集めたことを記しておきたい。(山本成生)

## 西欧・南欧

本欄では、二〇二二年を中心とした成果として、五二点を紹介する。全体的な傾向やその問題点・要因・対策等は、近年の「中

世」の諸欄で指摘されているものとはほぼ同じ意見であるため割愛する。順序は対象年代と地域、視角などを大まかな枠組みとする。通史等 西洋中世の各地域・分野に関して、優れた概説書がいくつかで刊行された。フロセル・サバテ著(阿部俊大監訳)「アラゴン連合王国の歴史」(明石書店)、イタリヤ史研究会編「イタリヤ史のフロンティア」(昭和堂)、立石博高・黒田祐我「図説 スペインの歴史」(河出書房新社)、菊池雄太編著「図説 中世ヨーロッパの商人」(同)などである。そこに適切なアップデートがなされた神崎忠昭「新版 ヨロッパの中世」(慶大出版会)と、学際的なアプローチを採る赤江雄一・岩波敦子編著「中世ヨーロッパの「伝統」」(慶大・言語文化研究所)も加えておこう。

初期中世 佐藤彰一「フランク史 II」(名大出版会)が順調に刊行された。本書は、メロウイング朝に特化した初の邦語の概説書であるが、史料と最新の研究動向の手触りを感じながら読むことができる。著者が強調する「単著による優れた概説書」を書く必要性を、中堅以上に共通する課題として受け止めたい。加納修「Entre singulier et pluriel」(Koji Wanabe ed. \* *Si est lens a fester* \*, CENT) は、カール大帝の伝記作家として有名なアインハルトの書簡と修道院長として彼が発給した証書を取り上げ、一人称の単数形・複数形の使い分けを論じる。修辭的な慣習に因る要素を慎重に取り除くと、アインハルト個人の身分観などが透けて見えるという。菊地重仁「恩恵」の剝奪(「政治的結合体」)は、各種文書にみられる威嚇条項やその対象者を精査し、西王朝にまたがるフランク王国の統治機構における「恩恵」の内実や役割に